

暮らしたことが今では夢のようである。高橋辰左エ門さん、柏木正雄さんも彼の世の人となっている。

戦後、入植五十年を経て現在を生きる私にとって、思い出すことは大八洲開拓組合は共同生活が原点であったということである。

佐藤孝治組合長を中心に昭和三十年まで全共同で生活した。入植後五十年を迎えて本当に良かったことは、中心者である組合長が高橋辰左エ門組合長（二代）、鈴木信組合長（三

人生五十年の歩み

あれから五十年早いものです。

大八洲開拓に仲間入りさせてもらって私も八十歳になろうとしております。満洲から引揚者として、終戦とともに私などには計り知れぬ苦勞が数多くあり、今は亡き団長さん始め先輩の方々が乗り越え、きびしい土地の中に大八洲開拓団として築き上げられた所に縁があり、現在に至りました。

戦争のために多くの人々や建物が犠牲になったことも私の頭から離れることなく焼きついております。

何故なら私も東京におりました。

出産して二十一日の日も立たぬ時、東京は三月九日に空襲にあい、乳飲み子の赤ん坊を抱え、火の中を死んだと思ひ込

代）、石田時雄現組合長を中心に生活ができたことを幸せに感じます。

何一つ特別優れたこともできず、今入植五十年の日を迎えることのできたのは、皆様のお陰と深く感謝の念で一杯です。

短歌

- 開拓の道を歩みて五十年 吾もこの地の人となりたり
- 故里を遠く離れて五十年 思い忍ばす今朝を降る雪
- 入植時吾も築きし利根の堤 今蜿蜒と菜の花盛る

今井その

みネンネコにくるみ、横に背負ってみんなと行く方向へ夢中で歩き続けて頑張った。アサヒビール会社の広場に集まったり、配給されるミルクを貰ったり、身体が冷えているだろうと焚き火をしてもらったりして休んでいるうちに、私も疲れ果て居眠りしていたら、となりにいる人に声をかけられ、背中で動いていますよと言われて急いで下ろしてみると、おぎゃーと言う声にもう夢中で乳を飲ませたらパクパク口を開いて、その時の言葉はもう出ません。ただ母としてこの赤ん坊のためにどんな事があっても守らなければと思ひ、焼け野原になった東京を後にして郷里の山形へ向いました。

赤ん坊は栄養失調、私はもう夢中で、着いたと同時に疲れはて、あれこれと三年世話になり、そうしているうち満洲から帰ってきた私の今は亡き姉が夫を紹介してくれたのが大八洲に世話になったきっかけです。

右左もわからない私を夫は勿論のことみんなに支えられながら、サツマ芋を食べたり、大根ごはんを食べながら一食一食腹が減っていても一くわ一くわ頑張っていて、夕方目の先が見えなくなるまでみんなで頑張りました。

あの頃はそれが当たり前の生活だったので、時が過ぎれば苦労だったよりなつかしく思い出され、信じられない時もあります。

子供達もそれなりに成長し、共同生活からやれやれという時に主人に亡くなられ、移転問題でやれやれという時に頼り

開拓を思い出すままに

一 渡満より引揚げまで

昭和十四年正月、第二の故郷と勇躍満州（現中国東北地区）

樺川県柳毛河へ入植した父・長次の家族招待で、私も一家が生れ故郷の米沢市綱木より渡満したのが同年十月、秋風が立つ頃でした。当時私は小学校四年生、九歳でしたので、

にしていた息子にまたも先立たられて、何で家ばかりと戦後や開拓の苦労よりも、手を折られたような自分は死んだ方と何度思ったことか。残された自分達の運命と思い返し、母ちゃんと二人で残された孫達を思い、一人前になるまでと力を合わせて頑張ってきたことで、孫も嫁をもらったり嫁いだりして、今では曾孫と会えるのが何よりの楽しみです。

ダルマのように何度か転びもあったが、多くのみんなに助けられ励まされてきたことを有り難く思います。

身体に気をつけて組合の一人として皆さんに迷惑をかけぬように今日いられるのも組合のお陰様と感謝しております。この年まで大八洲一員としていられること本当に感謝の気持ちであります。

田 中 栄 一 郎

今でいう家族旅行という感じで只々面白く、楽しみ一杯でした。この時、現在に至る第一歩の踏み出しとは夢想だに――。

米沢七軒町の叔母宅の庭先にて出発記念写真、南駅より米沢線にて新津へ。叔母達の見送りを受け乗船、船中は波が荒いため、誰もが船酔い状態、清津上陸後もフラフラで船に乗っているような気分、市内見物も全然だったことを思い出し